

池田の金比羅さま



池田の金比羅さま

江戸時代も終わりに近いある秋のこと。大阪の呉服問屋の主久兵衛は、内津峠を足ばやにくだつていた。

そのころの内津峠は、下街道の中でもいちばんの難所としてきこえ、年中陽のめを見ないところさえあるほどの、けわしい山道だったという。

そんな峠道を歩きながらも、なぜか久兵衛の足どりはかるやかだった。それというのも商売の思わしゅうないこのごろだけに、尾張で集金できた二百両という思ってもみない大金が久兵衛の胴巻にずっしりと入っているからである。

「おまえさん。暮れまでにや、なんとか集金がうまくいくといいがねえ。」

かわいい末娘の縁談がまとまってからというもの、何かにつけて金のことばかり口にする女房のことばが久兵衛の頭にかんでくる。

「このぶんなら、人さまにはすかしゅうない祝言もしてやれるやろ。ありがたいことや。」

女房の喜ぶ顔を思ってみるだけで、旅のつかれもどこかへ吹っ飛ばしてしまふ久兵衛だった。

「もう半里もすりゃあ、池田の宿やでろう。」

峠の茶店のばあさんのことばを思いだしながら、久兵衛は大道洞の坂道をくだって行った。

ふと見ると、道ばたの大杉の根もとに小さなほこらがある。なにげなくそばへ近寄ろうとした久兵衛は思わず足をとめた。今まで鳴きしきっていた虫の音が、ぱたりと、やんでしまったからである。とその時、ほこらのうしろの大杉のかけから一人の大男が現われ、久兵衛のゆく手に仁王立ちになった。

「金を出せ。」

太い、しわがれ声だ。手にはざらりと無気味に光る山刀がにぎられている。助けをよぼうにも、ねこの子一びき通らない山道。それに、夕暮れももうそのあたりまで来ている。

久兵衛は、まるでおこりにつかれたようにがたがたふるえながら、地面に額をこすりつけて必死に頼んだ。

「ど、どうぞお助けを。この金をとられてはもう暮らしていきません。家にや、女房や娘がわたしの掃りを待っております。なにとぞお慈悲を——。」

大男は、そんな頼みには耳もかさず、久兵衛の襟もとへ手をつつこんだかと思うと、虎の子二百両入った胴巻を、むぞうさにひきずり出してしまった。そして、胴巻の意外な重みをすばやく感じとると、にやりっ、とうす気味わるい笑いを残して立ち去ろうとした。

と、ちょうどその時である。

ほこらのうしろの大杉の梢が風もないのに、にわかになぎわめきはじめ、やがて小枝がギシギシ

鳴ったかと思うと、まるで百雷が一度に落ちたかと思うほどの大声が、内津峠の山々をふるわせてひびきわたった。

「やあいつ、その金返せえっ。」

思いもよらないできごとに、大男は肝をつぶさんばかりにおどろき、胴巻を目の前のほこらへ投げると、ほうほうのていで逃げ去った。

われにかえった久兵衛は、おそろおそろ大杉を見上げたが、梢はひっそりとしてなんの気配もない。そればかりか、いつのまにかもとどおりに、虫の声さえ聞こえてくる。

しばらくは、きつねに化かされたように、きよとんとしていた久兵衛は、大男の姿がないのに気づくと、

「そうだ。わしの胴巻は——。」

あたりを見まわすがはやいか、ほこらの前に胴巻をみつけた久兵衛は、もう夢中ではい寄りしつかりとにぎりしめていた。

「きつと、ほこらの金比羅さまのご加護にちがいない。」

久兵衛は、ほこらの前にうずくまり、涙を流して喜んだ。

その晩、池田の宿に泊まった久兵衛は、宿場の衆にできごとを話し、

「どうぞ、金比羅さまのお堂をりっぱに建てなおしておまつりください。」